

# 海印三昧について

鎌 田 茂 雄

## 一 はじめに

華嚴教学の全体的構造が、海印三昧 *sāgarānudrā samādhi, rgya-msho-hi phyag-rgya tin-ñe hdsin* を土台として構築されていることは、法蔵の『華嚴五教章』の冒頭に、「今將に釈迦仏の海印三昧、一乗の教義を開かんとするに、略して十門を作る<sup>(1)</sup>」とあることによつて明らかであり、華嚴經は一大法身・十身舎那仏が海印三昧に入定し、そこから説法したものであるといわれている。華嚴一乘同別二教は、必ず海印三昧によつて起るのであり、三乗が法住智によつて説かれるのは、根本的にことなる。海印三昧は華嚴經ならびに華嚴教学にとつて、きわめて重要な役割を果しているが、とくに海印三昧をもつて、その教理学形成の根本としたのは、中国華嚴宗の大成者法蔵であった。それでは一体、インドの大乗經典において、海印三昧がどのような意味で用いられ、

それが華嚴經においてどういう意味をもつたのか、また中国の華嚴宗が、どういう理由で、華嚴經中の海印三昧に着眼し、体系の基盤としたのか、というような問題について若干の考察をこころみたいと思う。

1 華嚴五教章卷一（大正藏四五卷四七七頁上）

## 二 大乘經典にあらわれた海印三昧

大乘經典は、インドにおける大乘仏教興起の運動の一環としてあらわれたものである。周知のように大乘經典は仏滅後かなりの年代をへて編纂されたものであるから、仏陀の説法ではないのであるが、形式上、仏陀の直説のような表現がとられている。また仏が經を説く時には、それぞれの三昧に入るのが普通とされている。例えば般若經を説くときには、等持王三昧 *samāpatirāja samādhi*、法華經を説く時には、無量義処三昧 *anantanirdesapratīṣṭhāna samādhi*、涅槃

經を説く時には不動三昧 *acala samādhi* に入るといふように、仏は三昧に入り、心を寂靜にして法を説くのである。そのほか大乘仏教經典の中には種々なる三昧が説かれている。例えば大乘仏教の代表的な經典としての『大般若經』問乘品第十八には、

復次須菩提、菩薩摩訶薩、摩訶衍、所謂名首楞嚴三昧、宝印三昧、師子遊戲三昧、妙月三昧、月幢相三昧、出諸法三昧、觀頂三昧、畢法性三昧、畢幢相三昧、金剛三昧、入法印三昧、三昧王安立三昧、放光三昧、力進三昧、高出三昧、必入弁才三昧、釈名字三昧、觀方三昧、陀羅尼印三昧、無誑三昧、攝諸法海三昧、遍覆虛空三昧、金剛輪三昧、宝断三昧、能照三昧、不求三昧、無住三昧、無心三昧、淨燈三昧、無辺明三昧、能作用三昧、普照明三昧、堅淨諸三昧、無垢明三昧、觀喜三昧、電光三昧、無尽三昧、威德三昧、離尽三昧、不動三昧、不退三昧、日燈三昧、月淨三昧、淨明三昧、能作明三昧、作行三昧、知相三昧、如金剛三昧、心住三昧、普明三昧、安立三昧、宝聚三昧、妙法印三昧、法等三昧、断喜三昧、到法頂三昧、能散三昧、分別諸法句三昧、字等相三昧、離字三昧、断縁三昧、不壞三昧、無種相三昧、無処行三昧、離朦昧三昧、無去三昧、不變異三昧、度縁三昧、集諸功德三昧、住無心三昧、淨妙華三昧、覺意三昧、無量弁三昧、無等等三昧、度諸法三昧、分別諸法三昧、散疑三昧、無処三昧、一莊嚴三昧、生行三昧、一行三昧、不一行三昧、妙行三昧、達一切有底散三昧、入名語三昧、離音声声字語三昧、然炬三昧、淨相三昧、破相三昧、一切種妙足

三昧、不喜苦樂三昧、無尽相三昧、陀羅尼三昧、攝諸邪正相三昧、滅憎愛三昧、逆順三昧、淨光三昧、堅固三昧、滿月淨光三昧、大莊嚴三昧、能照一切世三昧、三昧等三昧、攝一切有諍無諍三昧、不樂一切住処三昧、如住定三昧、壞身衰三昧、壞語如虛空三昧、離著虛空不染三昧。<sup>1)</sup>

と百八三昧が説かれている。この般若經の百八三昧が何のために説かれたか、という点について考えると、『大智度論』卷第四十七、釈摩訶衍品第十八之余では、

上は十八空を以て、般若波羅蜜 *prajñāpāramitā* を積す。今は百八三昧を以て、禪波羅蜜 *dhyanāpāramitā* を積す。百八三昧とは、仏自から其の義を説く。是の時、人利根なるが故に、皆信解を得たり。今は則ち然らず。論者重ねて其の義を釈し、解し易からしむ。<sup>2)</sup>

とのべ、百八三昧をもって、禪ハラミツを説明したものと解釈している。禪ハラミツは機根の勝れたものは、直ちにこれを理解することができるが、機根の低い者に理解し易くするために、百八三昧をもって禪ハラミツを説くのであるという。百八三昧は禪ハラミツの具体的内容を示すものともいえよう。つぎに『光讚般若經』摩訶般若波羅蜜無去來品第二十を見

ると、復た次に須菩提よ。菩薩摩訶薩、摩訶衍とは、謂く、一切の諸陀

羅尼門、諸三昧門、首楞嚴三昧なり。要を取りて、之を言わば、空等三昧、解脫三昧、無著三昧、寂滅三昧、是を菩薩摩訶薩、摩訶衍と謂う。

と説き、摩訶衍 mahayana とは、首楞嚴三昧 sūrangama samādhi をはじめとする諸三昧であるといい、大乘經典が三昧を修道の根本としてとらえていたことが示されている。

ところで海印三昧なる名称が、大乘經典にあらわれたのは、『大般若波羅蜜多經』卷第四一四、第二分三摩地品第十六之二である。すなわち、

云何が名けて、諸法等しく、海印三摩地に趣くと為すや。

謂く。若し此の三摩地に住する時、諸の勝定等をして、皆大海印の如きに趣入し、衆流を摂受せしむ。是の故に名けて諸法等しく趣く海印三摩地と為す。

とある。この般若經の文では、海印三昧は、諸三昧のなかで、もっとも根本的な三昧であり、一切の諸三昧の帰入するところであるといっている。

つぎに『大宝積經』卷第二十五、被甲莊嚴會第七之五では、無辺慧よ、諸の菩薩摩訶薩、此の法中に於て、修習を勤める者は、一理を以て、言教之門に趣き、而して能く一切諸法性の同一味を了知し、一切法に於て、勝を得て諍無く、理の寂靜なるが如く、相違背せず、能く大会に於て、斯の法を讚説し、精勤修習して一切法の海印三昧を得たり。(中略)無辺慧よ、諸の菩薩摩訶薩、此の法門に於て、是の如く住する者は、少加行を以て、一切法の

海印三昧を得たり。此の無量の法海三昧を以て、而して阿耨多羅三藐三菩提を發趣すべし。

とあり、さらに同じく大宝積經卷第二十一の被甲莊嚴會第七之一では、

世尊よ、如来の一切智者、一切見者は、何等の法を以て、諸の菩薩摩訶薩、一切諸法の海印三昧を成就するや。三昧をもつての故に。諸の菩薩摩訶薩、乃至末だ阿耨多羅三藐三菩提を証せざる者をして、猶、退轉せざらしむ。

とある。無上正等覺を得るためには、海印三昧に住しなければならぬという点を強調している。

そのほか『大集經』第十五の「虚空菩薩品」では、喩えば閻浮提の一切衆生の身、及び余の外色、是の如き等の色は、海中に皆印象あり。是を以ての故に大海印と名づく。菩薩も亦復是の如し。大海印三昧を得れば、能く分別して一切衆生の心行を見、一切の法門に於て、皆慧明を得ん。是を菩薩の海印三昧を得て、一切衆生の心行の所趣を見るとなす。

とある。海印三昧を説明して、海中に印象あるが如き三昧であるから、海印三昧と称するのだと説いている。Monier-Williams の梵英辞典を見ると、mudrā については a seal or any instrument used for sealing or stamping と説明しているの、印をおすこと及びその道具の意味であろう。海印とは比喩であるから、大海に印するが如き三昧という意味

をあらわしているかと思う。この海印三昧を得れば、一切衆生の心行を見、一切の法門に通達し、智慧が明らかになるという。海印三昧に入つて、無分別智を得ることによって、一切衆生の心の動きを知ることができるといふ意味であろうか。無分別の世界は、無我の世界であるから、自我の働らきとしての煩惱、我見がなくなつた境涯においてこそ、はじめて衆生の心や、他人の心の動きが、ありのままに映現してくるのである。

以上インドの大乗仏教の經典の中にあらわれた海印三昧をみたのであるが、それらの經典では、海印三昧をそれ程重要な特別な三昧としては説かなかつたようである。それでは華嚴經ではどのように説かれていたか、つぎに考察してみよう。

仏が華嚴經を説く時、そのもとずくところの三昧に総と別とがあるといわれる。すなわち全体的總括的にいえば、海印三昧に入つて説いたものといえる。さらに華嚴經を構成する各会についていうと、第一会は一切如来淨藏三昧、第二会は未だ位になつていないから、入定の三昧がなく、第三会は菩薩無量方便三昧、第四会は善伏三昧、第五会は明智三昧、第六会は大智慧光明三昧、第七会は仏華嚴三昧、第八会は如来師子奮迅三昧に入り、これらのおのおのの三昧から出定して説法したというのである。このような各会の三昧を「別」とすれば、「総」たる海印三昧こそもっとも根本的な三昧であ

り、華嚴經の全体に通ずるものである。この理由によって、のちの華嚴宗においては、八会の人法教義等すべて皆、如来の海印三昧の顯現したものであると解釈し、華嚴の法門が「海印三昧一時炳現の法門」と呼ばれた。

ところが、華嚴經にあらわれた海印三昧は、わずかの言葉によつて表現されているのみであつて、果してそれが華嚴經全体を成りたしめている根本定である、といえるかどうかも疑問のあるところである。すなわち『晋訳華嚴經』卷六、賢首菩薩品では、

或は刹土有るも仏有ることなし。彼に於いて示現し正覚を成ず。或は国土有るも法有ることなし。彼に於いて示現し、法蔵を説く。菩薩の希望一切断ずるも、一念頃に於いて、十方に遊ぶ。十方に示現すること満月の如く、無量の方便衆生を化す。彼の十方世界の中に於いて、念念に示現して仏道を成じ、正法輪を転じ、涅槃に入り、舍利を分ちて衆生の為に現す。

或は声聞縁覚道を現じ、成仏し普く莊嚴を現す。無量劫にわたつて衆生を度し、三乘門を以て広く開化を現す。或は男女の種種形、天人・竜神・阿修羅を現じ、諸の衆生の若干身、無量の行業、諸の音声に随ひ、一切に示現すること余り有ることなし。海印三昧の勢力の故に。

不可思議なる莊嚴の刹、一切仏を恭敬し、供養す。光明は莊嚴にして思議し難く、衆生を教化すること、量有ることなし。智慧自

在にして不可思議なり。説法教化自在を得たり。施戒・忍辱・精進・禪・方便・智慧の諸功德は、一切自在にして思議し難し。華嚴三昧の勢力の故に。

と説いている。法蔵の『探玄記』<sup>9)</sup>の解釈によると、この海印三昧以下、賢首品の説くものは、十三味の業用を明らかにするものであるとし、十三味として(1)円明海印三昧門、(2)華嚴妙行三昧門、(3)因陀羅網三昧門、(4)手出広供三昧門、(5)現諸法門三昧門、(6)四摂摂生三昧門、(7)窮同世間三昧門、(8)毛光覚照三昧門、(9)主伴嚴麗三昧門、(10)寂用無涯三昧門をあげている。故にこの海印三昧をのべている部分は十種の三昧門の一部にすぎないもので、すべての三昧の根本であるとはいえないものである。華嚴経そのものも、一種の項目羅列主義で諸三昧を説いたものであろうし、そこには構造的な体系は本来なかったものといえよう。

ところで、始めの「或は刹土有るも以下、舍利を分ちて衆生の為に現す」とあるのは現仏説法をあらわし、次の「或は声聞・縁覚道を現じ、成仏し普く莊嚴を現す。無量劫にわたって、衆生を度し、三乗門を以て広く開化を現す」とあるのは、仏が三乗に現するのを明らかにしたものであるといわれている。声聞縁覚の二乗を捨て去ってしまったのではなくて、それらの二乗も一仏乗の中に融会する立場をよくあらわしており、三乗即一乗<sup>10)</sup>の精神が顕著に見られる。さらに仏は男女

の種々形、天人・竜神・阿脩羅になって応現し、一切のものに示現するといっているのであるが、これなどは『法華経』の觀世音菩薩普門品にあらわれている、觀世音菩薩が三十三身を現じて応現する説き方と類似の考え方にたつものといえよう。とにかく仏が三乘人や、一切の生類に応現できるのは、海印三昧の力によるのである、と説くのが華嚴経の説相であった。

華嚴宗の第五祖澄観は海印の義を説明するのに十義をもつて、海印三昧の無尽の働らきを明らかにした。十義とは(1)無心にして能く現する義、(2)現じて所現なき義、(3)能現と所現とが一に非ざる義、(4)能現と所現とが異に非ざる義、(5)去来無き義、(6)広大の義、(7)普現の義、(8)頓現の義、(9)常現の義、(10)非現現の義である。澄観はこれらの十義を説明するのに「如来出現品」の経文を引用する。彼は海印の義を説明するのに、先に引用した『大集経』の経文をあげ、そのあとで「然るに此の経文多く出現に同じ。但出現は四天下像を現す」とのべて、大集経において海印三昧を説いている箇所と、華嚴経の如来出現品の説相がきわめて類似しているという。澄観が如来出現品において海印三昧を説いているというのは、唐訳華嚴経卷五十二、如来出現品の

一念中に於いて、悉く三世一切の諸法を知る。仏子よ。譬えば大海の如し。普く能く四天下中の一切衆生の色身形像に印現す。是

の故に共に説いて以て大海と為す。諸仏菩提亦た復た是の如し。普く一切衆生の心念・根性・樂欲に現するも、而も現する所なし。是の故に説いて諸仏菩提と名く<sup>(12)</sup>。

という言葉である。これが果して海印三昧を説いた経文であるか否かはつきりしないのであるが、この文をくりかえして頌をもって説いた文には、

正覚了知一切法、無二離二悉平等、  
自性清淨如虚空、我与非我不分別、  
如海印。現衆生身、以此説其為大海、  
菩提普印諸心行、是故説名為正覚<sup>(13)</sup>、

とあって、海印の語が見えている。ちなみに晋訳六十華嚴經のその箇所では、

了達一切法、皆悉如虚空、  
非我非無我、等覚一切法、  
譬如諸大海、一切衆生類、  
色像悉顯現、故説一切印<sup>(14)</sup>。

とあり、「海印」に相当するところが、「一切印」となっている。この如来現相品にもとづく澄觀の海印三昧解釈は、彼の海印三昧思想をあらわすものなので、後節において論じ、ここでは経文のみを見てゆきたいと思う。

以上みた如く、華嚴經にあらわれた海印三昧は、賢首品にその内容が説かれているのと、宝王如来性起品（如来現相

品）の説相が海印三昧を説いているのと、内容に関しては二箇所のみである<sup>(15)</sup>。これを要するに、華嚴經にあらわれた海印三昧とは、仏があらゆるものに示現する働らきとして、あらゆる勢力を意味し、またこの海印三昧の大海の中に、無量の一切衆生の色像が現することをいう。一切を包摂し、一切をそこに顕現せしめる、鏡の如き絶対的境地を意味する。われわれ衆生の本性は、本来鏡の如き絶対無限なる一眞実の世界である。そのような清冽な無限に湧き出る泉のような透徹した主体にとっては、一切の世界はただ映されたものとして、ありのままなる存在をえがき出すであろう。そこでは心も、自然も物も、美も醜も、善も悪も、ありのままに映現する。そのような絶対無限の眞実心を海印三昧と名づけたのであるうか。

- 1 摩訶般若波羅蜜經（大正藏八卷二五一頁上中）
- 2 大智度論卷四十七（大正藏二五卷三九八頁下）
- 3 光讚般若經卷八（大正藏八卷二〇〇頁下）
- 4 大般若波羅蜜多經卷四一四（大正藏七卷七五頁上）
- 5 大宝積經卷二五（大正藏十一卷一三九頁上中）
- 6 同 卷二一（同一一四頁下）
- 7 大集經第十四（大正藏十五卷一〇六頁下）

なお大集經には海印三昧の言葉が多く出ている。例えば、同じく十五卷に「善男子、云何菩薩得海印三昧、能知一切衆生心行者、若菩薩多聞如海」（二〇六頁中）とあり、十四卷にも、「云

何菩薩得海印三昧、善能得知衆生心行」(九六頁上)とあり、十六卷には「有三昧名曰海印、能得總持諸仏所説」(一一三頁中)とある。

#### 8 六十華嚴經卷九(大正藏九卷四三四頁下)

なお唐訳華嚴經卷第十四、賢首品では「或現声聞獨覺道、或現成仏普莊嚴、如是開闡三乘教、广度衆生無量劫、或現童男童女形、天竜及以阿脩羅、乃至摩睺羅伽等、隨其所樂悉令見、衆生形相各不同、行業音声亦無量、如是一切皆能現、海印三昧威神力、嚴淨不可思議刹、供養一切諸如来、放大光明無有辺、度脱衆生亦無限、智慧自在不思議、説法言辞無有礙、施戒忍進及禪定、智慧方便神通等、如是一切皆自在、以仏華嚴三昧力。」(大正藏一〇卷七三頁下―四頁上)となっており、その表現において若干異なっている点がある。

#### 9 探玄記卷四(大正藏三五卷一八八頁下―一九頁中)

10 華嚴学について一乗・三乗を説いている部分は非常に多いが、その主たる箇所を二、三あげると、まず地論宗の慧遠の『大乘義章』浄法聚の中の「一乗義」(大正藏四四卷六四八頁以下)がある。つぎに智儼の『孔目章』卷一の「盧舎那仏品中雲集文末普賢文中立一乗三乘義章」(大正藏四五卷五三七頁中以下)が重要である。さらに法蔵の『探玄記』卷一の立教差別中の(6)定権実、(7)顕開合、『五教章』卷一、権実差別などが必読の箇所である。なお新羅の表員の『華嚴經文義要決問答』卷三(大日本統蔵經一輯一二套四冊、三四四丁右上)も一乗についてまとめているので便利である。

11 華嚴經疏卷一六(大正藏三五卷六二二頁中)

12 八十華嚴經卷五二(大正藏一〇卷二七五頁下)

ちなみに六十華嚴經の文をあげると「仏子、譬如大海、為一切衆生色像之印、是故大海説名為印、如来応供等正覺菩提、亦復如是、一切衆生心念諸根、現菩提中、而無所現、故説如来、為一切覺」(如来性起品、大正藏九卷六二六頁下)となっている。

13 八十華嚴經卷五十二(大正藏十卷二七五頁下)

14 六十華嚴經卷三十五(大正藏九卷六二七頁中)

15 海印三昧の語のみならば、十地品第二十二之五にも見える。

「又入法界差別三昧、莊嚴道場三昧、雨一切世間華光三昧、海蔵三昧、海印三昧、虚空広三昧、觀察一切法性三昧、随一切衆生心行三昧、如実知一切法三昧、得如来智信三昧、如是等百万阿僧祇三昧皆現在前。」(大正藏九卷五七一頁下)

### 三 華嚴教学における海印三昧の位置

中国に華嚴經が翻訳されたのは、東晋の仏陀跋陀羅 Bud-dhabhadra (三五九―四二九)に始まるのであるが、華嚴經は南北朝時代にも多くの学者によって研究講述された。また一方、華嚴經の読誦や書写を中心とする華嚴經信仰も、僧侶をはじめとし、一般の人々に浸透していった。中国仏教者はこの貌大にして広濶なる華嚴經をうけとって、さまざまな思いにひたつたことであろう。華嚴經を根本法輪として教相判

釈の立場から考究した仏教者もあろうし、また善財童子の究道の旅に深い感激をもち、華嚴経を誦しつつ、「普賢の境界、常に吾が前に現す」という宗教体験をもった仏教者もあつた。或いはまた、華嚴経を石室内に雕刻し、その石室を華嚴堂と称した人もある。そのほか曇遂は華嚴経十地品第六現前地の中心思想である「三界虚妄、但是一心作」の经文を唱えたという。華嚴経信仰がこのようにいろいろなタイプにあらわれてきたと思われるが、その中で三昧を中心において華嚴経信仰に徹した人に、解脱及びその弟子明曜がある。解脱は五台山夾川の人であり、七歳で出家し名匠に投じた。彼は禅思を志したというから、禅觀の実修者であつた。五台県の照果寺に往き、さらに五台山の南の仏光寺に四十余年住したという。解脱は仏光三昧觀に入ったといわれるが、弟子明曜もまた仏光觀を修し、のちに李通玄にも継承された。ちなみに日本の桐尾の明慧上人高辨は『華嚴仏光三昧觀秘宝藏』巻下のなかで、仏光三昧觀をのべるにあたって、法蔵の『華嚴経伝記』にのべられた仏光觀を引証している。

ところでここで問題となるのは、海印三昧がのちの発達した華嚴学の根本定となつたのであるが、それがどのような背景によって成立したのか、という点である。華嚴経にあらわれた海印三昧は、決して華嚴経全体の中で中心的地位を占めるものではなく、多くの三昧の一つにすぎないようである。

ところが、法蔵の五教章でも、華嚴経伝記においても、その冒頭において、一乗教義は海印三昧より生れた教学である点を強調している。インドか、中央アジアで成立編纂された大華嚴経の思想の核心に、この海印三昧をすえるようになったのは、一体どのような理由によるのか、ということが明らかにならないと、海印三昧の真義が明確にならないと思う。

さて、このような問題意識から海印三昧について考えて見ると、華嚴宗成立以前の状況は資料のないため、ほとんど不明である。先にのべたように、華嚴経信仰者のなかには仏光三昧を修したり、三界唯一心を唱えたような信仰者はいたが、海印三昧をもって根本定とし、海印三昧にもとずいて、華嚴経を理解しようとした仏教者は皆無なようである。これは資料的な欠陥によって、そのように考えられるのかも知れないが、資料がほとんどないということは海印三昧を考察する上の大きな障害といわねばならないであろう。たとえば法上の敦煌本『十地論義疏』を見ても、それが断簡にすぎないものであるため、全体を見ることができず、現存資料の中には海印三昧についての説明は見あたらない。十地経の中に言葉のみであるが海印三昧が出てくるのであるから、あるいは註釈しているとも思われるが、慧遠の『十地経論義記』にもその説明は見あたらないようである。このように資料的に限界があるため、華嚴学における海印三昧の位置を考えるには、問

題を華嚴宗の祖師の中に限定し、彼らの思想形成の中で、海印三昧がどのような教学上の位置を占めたかを、考察せざるを得ないと思う。

華嚴宗の第一祖杜順の法界觀門は、華嚴宗独立の金字塔をあらわすものといわれている。いわゆる「觀によって經を括つ」たものであり、あの貌大な華嚴經の思想を三種の法界觀によって総括したことは、大きな思想的意義があるといえよう。海印三昧という点から法界觀門を見ると、法界觀門はどこまでも、真空觀、理事無礙觀、周遍含容觀の真相を哲学的組織的にあらわそうとするものであって、海印三昧のような「定」との関係は取りあつかわれておらない。法界觀門の中に海印三昧の言葉があらわれてないからといって、それが存在しないのではない。周遍含容觀にあらわれた事と事の円融無礙が成立するには、海印三昧の如き定力が、その根底になければならないからである。

さて、法界觀門においては、海印三昧の語が見られないのであるが、杜順和尚の説をうけて智儼が撰集したという『一乘十玄門』には、海印三昧があらわれてくる。華嚴一乘十玄門は一乘縁起たる法界縁起を明らかにするために撰述されたものであるが、十玄門の中の第一同時具足相應門の中に海印三昧がでてゐる。すなわち、

今第一同時具足相應門を釈するとは、即ち具さに教義・理事等の

十門同時なるを明らかにするなり。何を以て是の如きを得るや。良に、縁起実徳法性、海印三昧の力用に由るが故に然るを得るなり。是れ方便縁修の所成に非ざるが故に、同時を得るなり。<sup>(8)</sup>

とのべている。第一同時具足相應門とは、教義・理事等の十門同時なるを明らかにするといっているが、十門とは、教義・理事・解行・因果・人法・分齊境位・法智師弟・主伴依正・逆順体用・随生根欲性の十をいう。一乘十玄門ではこの十を夫々説明して、(1)教義とは探玄記<sup>(9)</sup>では「教義具足」といっているものであるが、能詮の教と所詮の義の不二一体なることを示し、(2)理事とは、蓮華の華相を事とし、華体を理とすれば理事一体不二なることが分るように、事即理なる点をあらわし、(3)解行とは三乗教では解と行とが別なものであるが、華嚴一乘においては解即行となり、(4)因果とは、修行を因、究極円満なるを果とし、(5)人法は、文殊は智慧をあらわすから、法を得たものとすれば、普賢は人であり、人即法なることを明らかにしたものであり、(6)分齊境位では、すべての諸法は法界縁起し、円融相即の関係にあるが、しかもその諸法の夫々は自性を守って、決して各々の分位をおかさず、整然として個物の世界を現出していることであり、(7)法智師弟とは、開発を師、相成を弟子とするのであり、法の相続のうえにおいて、師弟一体不二の境地をあらわす点をのべ、(8)主伴依正は、諸法の歴然として混在している中で、その一法をとつ

て主とすれば、他は伴となる関係をあらわす。個物が夫々交替して主となることによって、主と伴とが同時相即するところの蓮華藏世界海(10)の風光を説いたもの、(9)逆順体用とは、成壞の義であり、(10)随生根欲性とは、衆生の機根にしたがって、それに応現することができることをあらわす。

今この同時具足相応門において、教義・理事等の十門の同時なるを明らかにすることができるといふのは、縁起の実徳とたる法性や、海印三昧の力用によるという。縁起の実徳とはどのような意味かはつきり分らないが、縁起集成している現実の世界の実性たる法性を意味することは明らかであり、それが海印三昧の力用にもとずくという。さらにこの点を明確にするため、『華嚴五教章』巻四、義理分齊にあらわれた同時具足相応門の解釈を見てみよう。

一には同時具足相応門なり。此の上の十義は同時に相応して一縁起を成ず。前後始終等の別有ることなし。一切を具足して自在逆順たり。参じて雑せず、縁起の際を成ず。此れ海印三昧に依りて、(11)炳然として同時顕現を成ずるなり。

とのべており、一乗十玄門の説相よりも、一段と明確に説かれている。縁起している諸法は、前後始終の区別なく、同時相応しているが、しかもこのような参羅万象も、各々混雑することなく、その分齊・分限をしっかりと保持しているといふ。このように縁起せる諸法が「参じて雑ぜざる」のは、海

印三昧によって炳然として同時に顕現しているからである。まさしく華嚴経に仏が一切の万有に示現し、あらゆる有情・非情に顕現するのは、海印三昧の勢力によるとあったが、この華嚴経の海印三昧を、より哲学的に、より組織的に説明すると、一乗十玄門や五教章における海印三昧の解釈となるであろう。

ところで十玄門の中の第一同時具足相応門は総別から見れば、総門とも考えられるものであるから、海印三昧の力用によつて同時具足相応門が展開していることは、十玄門の根底に海印三昧をおいて大過ないと思う。

つぎに智儼において、海印三昧がどのように位置づけられたかを考察すると、それは『孔目章』第四、「融会三乗決顕明一乗之妙趣」のべられている。この「融会三乗決顕明一乗之妙趣」の一節は一体何を主張しているかといへば、

夫れ円通の法は、具徳を以て宗と為す。縁起の理、実に二門を用いて取会せり。其の二門とは、所謂、同別二教なり。別教とは三乗に別するが故に。法華経に云く、三界の外、別に大牛の車を索むるが故なり。同教とは、経に会三帰一と云うが故に、同を知るなり。(12)

とある如く、一乗同別二教を明らかにするために説いたものである。ちなみにこの孔目章の教説は法蔵の五教章の冒頭に正しく継承されている。この孔目章の中では、一乗と三乗と

を対比しつつ説いており、その中で、

一乗同別の教義は、海印定に依りて起る。普賢の所知なり。三乗教義は仏の後得法住智に依りて説く。<sup>13)</sup>

とのべている。一乗同別二教は海印三昧に依って起り、普賢因人の所知であり、三乗教義が、仏の後得智、法住智 *dharmasthiti jāna* によって説かれるのと根本的に相違しているという。この孔目章の説き方からすれば海印三昧は、因位の立場をあらわすものといえよう。

海印三昧を華嚴教学の中核にすえたのは、杜順・智儼の華嚴学を継承しつつ発展させた法蔵である。法蔵の三十有余歳頃の著書といわれる華嚴五教章では、最初にのべた如く海印三昧をもって一乗教義の根本定としたことは周知の事実である。そのほか『華嚴経伝記』巻一では、

案ずるに、此の經、是れ毘盧遮那仏の法界身雲・蓮華藏莊嚴世界海に在りて、海印三昧内に於いて、普賢等の海会の聖衆、大菩薩のための所説なり。<sup>14)</sup>

とのべている。法蔵が五教章の中で一乗・三乗の対比をする場合、海印定を説いたのは、孔目章の継承にほかならない。

『華嚴経文義綱目』においても、海印三昧が説かれるが、ここでは所依の三昧を八会に夫々相応させ、華嚴経の第一会は一切如来淨藏三昧、第二会は所依の三昧なく、第三会は菩薩無量方便三昧、第四会は善伏三昧、第五会は明智三昧、第六

会は大智慧光明三昧、第七会は仏華嚴三昧、第八会は如来師子奮迅三昧が入定の三昧であるとする。さらにつづいて海印三昧については

總とは然るに此の八会の人法教義等、皆如来の海印三昧の顕現する所なるに依るが故なり。賢首品に云く、一切示現して余りあることなし。海印三昧の勢力の故に。<sup>15)</sup>

とのべており、華嚴経賢首品の出典にもとずいて、海印三昧を説き、この海印三昧こそ、すべての三昧の根本定たることを示している。それでは海印三昧とは、どのような意味をもつか、次節では海印三昧の思想について考察を加えたいと思う。

- 1 南北朝時代の華嚴経の研究者には、法業・慧観・玄暢・劉虬・靈辨・曇無最・智炬・法上・僧範・道憑・靈裕などがある。詳しくは拙稿「中国南北朝時代の華嚴研究序説」(駒沢大学教育学部紀要第二十三号、昭和四十年三月)参照されたい。
- 2 南北朝時代の華嚴経信仰については、拙著『中国華嚴思想史の研究』(東京大学出版会、昭和四十年三月)第一章「華嚴宗成立の社会的背景」参照されたい。
- 3 解脱の伝は『統高僧伝』巻二十の習禅篇、及び華嚴経伝記巻四にある。
- 4 明曜の伝は、統高僧伝巻二十の解脱伝に附伝されている。
- 5 李通玄の伝記は、宋高僧伝巻二十二、感通篇や、その外、隆興仏教編年通論巻十六、唐釈教文巻二十二、仏法金湯篇巻八、

居士伝卷十四などにもある。李通玄については、独立した研究が望まれる。

6 十地論義疏卷一では法性三昧について「以金剛藏入法性三昧与諸仏体同故、諸仏在定中、為説十地法用、辨十地自体（大正蔵八五卷七六一頁上）とのべている。三昧については「三昧分者、仏性門中入寂分凡有二義、一表十地理、深非証不説、二欲受加、是故入三昧也」（七六一頁上）とのべている。

7 十地経論義記では、三昧について「三昧是其中国之言、此名正定、以心住法、離於邪乱故、名正定」（大日本統蔵経一輯七一套二冊、一三八丁左上）といい、さらに「所謂此於大乘法門故、金剛藏入名為大乘三昧」（一三六丁左下）とのべている。

8 華嚴一乘十玄門（大正蔵四五卷五一五頁下）

9 十義について探玄記では、「就初門中、有十義具足、一教義具足、二理事、三境智、四行位、五因果、六依正、七体用、八人法、九逆順、十忠感具足」（大正蔵三五卷一二三頁中）となっている。そのほか五教章、文義綱目参照のこと。

10 拙稿「華嚴経のめざすもの」、理想、昭和四十年九月号。

11 華嚴五教章卷四（大正蔵四五卷五〇五頁上）

12 華嚴経内章門等雜孔目章卷四（大正蔵四五卷五八五頁下）

13 同（同、五八六頁中）

14 華嚴経伝記卷一（大正蔵五一卷一五三頁上）。なお四明山・大方広無生居士、胡幽貞の刊纂した『華嚴経感応伝』の末尾にも、「予師事禅祖無名公側、聞普賢大行海印深定法界体性、方知、華嚴积氏宗極、所以刊修此伝、広示未聞也」とのべている。

15 華嚴経文義綱目（大正蔵三五卷四九八頁下）

#### 四 華嚴教学における海印三昧の意義

華嚴教学における海印三昧の位置づけについては、すでに論じたのであるが、本節では法蔵ならびに澄観が海印三昧をどのように理解したかを考察したい。

法蔵の著『遊心法界記』においては、三昧を説明し、三昧とは理智無二にして、交徹鎔融せり。彼此俱に亡じ、能所斯に絶するが故に三昧という。<sup>(1)</sup>

とあり、主観と客観が不二融即した点をとらえて三昧と称している。まさしく主客未分の当体を指している。しかも理と智が一如たるところに三昧が現出するという。法蔵はさらに華嚴三昧と海印三昧とを比較し、

此れ解行に言を為して、名けて華嚴三昧と為す。其の果に拠るが如きは、亦是海印三昧と名く。此れ即ち同時前後を名と為し、頓現互融を目と為す。猶大海に四兵の像を現わすに、後類各々差ありて頓に前後を現前するが如し。然して即ち像形一に非ざれども、水竟に殊ならず。像は即ち水にして湛然、水は即ち像にして繁雜、歴然として前後あるも、終始源め難し。宛爾として繁興すれども、寂然として無相なり。頭を齊しくして頓に現す。隠顯知り難し。互入して羈けることなし。鎔融絶慮たり。<sup>(2)</sup>

と。この遊心法界記の説き方によると、華嚴三昧が因、海印三昧が果をあらわす。この海印三昧の説明によると、海印三昧中に一切の像が現前し、その像は各々異なっているが、水は湛然として動ずることがない。像を水の立場から見れば、像は繁雑なるにもかかわらず、湛然たる世界を現出し、水を像の立場からみれば、水は本来湛然たるものであるにもかかわらず、歴然として前後ありという。森羅万象は個物の独立自存の集合であるにもかかわらず、それがそのまま一如湛然たる絶対真実の世界をあらわす。まさに常識的に考えるならば不可思議というほかないものであるが、悟りの世界においては、まさにしかあるべき了了常知の世界でなければならぬ。

この遊心法界記の説くところに従えば、海印三昧は果をあらわすといわれるが、それは華嚴三昧に対するからであって、海印三昧のみをとりだして見れば、海印三昧は因果二位に通ずる。すなわち法蔵の『探玄記』巻第一においては、

海印炳現門とは、亦二義有り。一には果位に約す。前の差別の無尽の教法の如く、皆是れ如来海印定中、同時に炳然として円明に顕現するなり。所化の機を設くるも亦同じく、縁起して此中に在りて現す。是の故に唯此の三昧海を以て、斯の教体となすなり。下文に「一切示現して余りあることなし。海印三昧の勢力の故に」と云うが如し。二には因位に約す。要らず普賢等の諸大菩薩、方

に此の定を得、前の業用と同じく、亦差別なし。是の故に十信満ずる処、普賢位中、亦此の定を得たり。賢首品に説くが如し。

とのべているように、海印三昧にも因果二位の立場がある。果位は如来の海印定を意味し、因位は十信位のところにおいて普賢菩薩がこの海印三昧を得ることができるといふ。

そこで法蔵の海印三昧の意義を理解するには、まず因位たる菩薩の定心を海印三昧と呼んでいる点から説くことにしよう。因位の意味における海印三昧は賢首品の説くところである。前節にのべた『一乗十玄門』の所説の如く、法界縁起を成立せしめる根本定が海印三昧であるというような理解がこれに相当する。『探玄記』巻四において

海印とは喩に従つて名となす。修羅の四兵空中に列在するは、大海内に於いて、其の像を印現するが如し。菩薩の定心、猶お、大海の如し。機に応じ異を現すること、彼の兵像の如きが故に。

とのべているのも、このような意味における海印三昧の解釈である。われわれ衆生の心の中には、無明妄念の風波がたち、しばらくもとどまるところがない。しかし一度び定心を得れば、あらゆる物が印現しているにもかかわらず、しかもそれにとらわれたり、迷わされることがない。大海の如く、一切の諸法を炳然として現じ、万有のありのままを顕現させ、機に応じて映現する。菩薩の定心を海印三昧と呼称する意味がここにはっきりとあらわれているといえよう。

第二は果位の立場から海印三昧を見るのであるが、「如来海印定」といつているだけで、具体的な説明をほとんどしていない。宗教的体験としての絶対無限の真実は、言説の及ぶところではない。それは究極の根本的直覚の世界をあらわしているのであるが、起信論のいう如く、あえて「言によって言をやる」という立場で説明するとすれば、おのずと哲学的解釈をとらざるを得ないであろう。仏教の宗教体験を哲学的術語で表現しようとするれば、絶対者をあらわすのに真如・實際・本覚・仏性・如来蔵・空などの言葉を用いるしか方法がないのである。そこで法蔵も、真如本覚に約して海印三昧を説いている。

法蔵の著といわれる『妄尽還源觀』については、果して法蔵の書であるかどうか疑問を呈する学者もいるが、ここではその問題については深くはたち入ることをせず、他日それについての詳細なる研究を發表したいと思つていたので、本論では法蔵の著作として取扱つておくことにする。『妄尽還源觀』は法蔵の觀門の書であり、一体二用三遍四徳五止六觀を説いたものといわれる。一体とは、自性清淨円明体をあらわし、二用とは海印森羅常住用と法界円明自在用である。この二用の中、海印森羅常住こそ、海印三昧をあらわすものである。すなわち、

一には海印森羅常住用なり。海印というは、真如本覚なり。妄尽

き心澄み、万象育しく現ず。猶お大海の風に因りて浪を起すに、若し風止息すれば、海水澄清にして、象として現ぜざるなし。起信論に云く、無量功德蔵、法性真如海なりと。所以に名けて海印三昧となすなり。經に云く、森羅及万象は、一法の所印なり。一法というは所謂一心なり。是の心即ち一切世間・出世間の法を攝す。即ち是れ一法界大總相、法門の体なり。唯だ妄念に依りて差別有り。若し妄念を離るれば、唯一真如なり。故に海印三昧というなり。華嚴經に云く、或は童男・童女形・天竜及び阿脩羅、乃至摩臘羅伽等を以て現じ、其の所樂に随つて悉く見せしむ。此の義に依るが故に、海印三昧と名くるなり。

とある。ここで法蔵が海印三昧を説明するのに、引用している華嚴經は、晋訳六十華嚴經ではなくて、実叉難陀 *Sikṣāna-* *kośa* 訳の唐訳八十華嚴經の文であり、引用文は八十華嚴の文に一字もちがわず符合する。法蔵は六十華嚴によって彼の華嚴学を建立したのに、この妄尽還源觀のみは八十華嚴によつていっているのは、どういう理由か不明であるが、法蔵は則天武后の命によつて実叉難陀が新たに訳出した華嚴經に対しても、深い興味を抱いたのである。普寂のいうように妄尽還源觀には八十華嚴が引用されているので、法蔵の著作であることが疑問であるとも考えられるが、その点のみから、法蔵の眞作を否定することはできないであろう。八十華嚴の訳出後、法蔵の歿年までには、十年以上あつたのであるから、その間

に八十華嚴も読んでいたとすれば、説明はつくのである。その点についての詳しい研究は他日にゆずることにし、ここではさらに論をすすめることにしたい。

さてこの妄尽還源觀の海印三昧の説明を見ると、まず海印というのは真如本覺であるとし、一切の妄想の尽きたところ、清澄なる生命の当体には、一切の万象が映現するという。起信論の法性真如海がすなわち海印三昧に相当すると主張する。さらに七世紀の前半に偽作された『法句經』の一文「森羅及万象は、一法の所印なり」を引用し、海印三昧の經証としている。この法句經の一文は、中唐に偽作された『寶藏論』などをはじめ、多くの禪關係の文献にも引用されたものであり、妄尽還源觀にこの法句經の引用のあることは、その性格を考ふるうえに、見落してはならない点である。さらに法藏はこの經文にあらわれた「一法」を「一心」とし、起信論の一法界、大總相、法門の体にあてている。海印三昧とは妄念を離れた一真如の世界であるというのが、この妄尽還源觀の所説である。この場合海印三昧はたんなる定を意味するのではなくて、定の自体というか、定よりももっと深い定体そのものであり、それは自性清淨円明体を所依としている。海印三昧の中に童男童女等の形を現するというが、これは外よりきて現するのではなく、もともとこれは真如法性体内にそなわっているところの、依正色心、森羅万象であつて、真如法

性にはこれらが本来備わっていることをあらわしている。妄尽還源觀の海印三昧の説き方は、起信論によるところが多いため、華嚴の鳳潭のように、還源觀の説き方は、終教に寄せた海印三昧を説明しており、華嚴円教の海印三昧ではないという批判もあるが、ここでは海印三昧の解釈に真如法性海の義をもつてする解釈もあり得る点をのべたのである。

この妄尽還源觀の海印三昧解釈は起信論にもとずいてなされたのであるが、澄觀はこれとも異なつて、海印三昧を如来の智慧海に約して解釈している。澄觀が仏果菩提に約して海印三昧を説く根拠となつた經文は、すでに第二節で海印三昧を説いている經文としてあげた「如来現相品」の一文である。

八十華嚴經現相品の一文は性起菩提の智中には、一切衆生の色身形像を悉く顯現して一も余すことがない点をのべている。『華嚴經疏』はこの一文を註釈して、「万機を印現するは、即ち海印三昧なり」とのべ、菩提の無心頓現の世界をあらわすという。さらに經文の「無所現」を説明して、

無所現というは三義あり。一には無心にして現するが故に海の如し。二には現する所、空なるが故に像の如し。三には別体無き故に、水と像と分異すべからず。自体顯現の故に名けて覺となす。起信論に云く、諸仏如来、見想を離れ、所として遍せざるなし。心眞実なるが故に。即ち是れ諸法の性・自体なり。一切の妄法を顯為するは大智の用なり。斯れ即ち思なし。

とのべている。一切衆生の根欲・煩惱を映すことが可能なのは、主体が「無心」であるからであり、しかも無心の境地に映る影像も、また空ぜられたものでなければならぬ。われわれの生命の奥底には、清冽な鏡のような絶対無限の生命が脈うっている。そこでは煩惱が煩惱のままに映現しているのであって、煩惱あつても、それに執することがない真実の世界である。澄観はこの境地を説明するのに、起信論を引用している。想念を離れたところ、仏果菩提は一切に遍満し、彌淪し、一切は真実の世界とならねばならない。海印三昧が一切を顕現してあますところなしといわれるのは、仏果菩提、性起の智に立脚するからである。澄観は『演義鈔』第一において、

今此の經の説くは何の三昧に依る。即ち海印三昧なり。海印とは是れ喩なり。喩に従つて名を受く。賢首品疏に当に広く之を説くべし。今略して其の相を示す。謂く。香海澄淨にして湛然として動かす。四天下の中に、色身形像皆其の中に於いて印文有り。印とは物を印するが如し。亦猶お澄波万頃、晴天に雲なく、列宿星月、炳然として齊しく現じ、来なく去なく、有に非ず、無に非ず、不一不異なるが如し。如来の智海には識浪生ぜず。澄淨清淨、至明至静、無心にして頓に一切衆生の心念根欲を現す。心念根欲並びに智中に在ること、海の象を含むが如し。<sup>1)</sup>

といっているが、まことに海印三昧の当体をみごとにえがい

ている。清淨至明なる無心の世界に、万像齊しく現じ、しかも万像は非有非無であることは、万像に体なく、映す鏡も不増不減であることを示す。われわれ凡夫の根欲性や妄念も如来の智中にあるとは、端的にその本質をついている。われわれ衆生の妄念は、如来智の中にあるのである。すなわち海印三昧のなかにあるのである。海印三昧の真只中に影現している。如来智中にあるのであるから、有といつても実有にあらざして、非有となり、無といつても、現実の衆生には煩惱は現に存在しているのであるから、非無といわねばならない。『華嚴経疏』第一において澄観はいう。

湛たる智海、澄波、虚にして万象を含み、皦たる性空、満月、頓に百川に落つ。<sup>2)</sup>

海印三昧の境涯まさにここにきままれりというべきであるう。

- 1 遊心法界記(大正蔵四五卷六四六頁中)
- 2 同 (同、六四六頁中)
- 3 探玄記卷一(大正蔵三五卷一一九頁下)
- 4 同 卷四(同、一八九頁上)
- 5 詳しくは『華嚴五教章講讚』卷一参照。
- 6 妄尽還源觀に「今略明此觀、總分六門、先列名、後広辨、一 顯一体、謂自性清淨円明体、二起二用、一者海印森羅常住用、二者法界円明自在用、三示三遍、一者一塵普周法界遍、二者一塵出生無尽遍、三者一塵含容空有遍。(中略)六起六觀、一者

塵出生無尽遍、三者一塵含容空有遍。(中略)六起六觀、一者

撰境帰心真空観、二者従心現境妙有観、三者心境秘密円融観、四者智身影現衆縁観、五者多身入一境界観、六者主伴互現帝網観」(大正蔵四五卷六三三七頁中)とある。この還源観の文を、澄観は十門三味の業用を説明するために引用している(演義鈔卷三十五、大正蔵三六卷二七〇頁上中)。「遺忘集」の十観、すなわち「撰相帰真観、相証実観、相実無礙観、随相撰生観、縁起相収観、微細容撰観、一多相即観、帝網重重観、主伴円融観、果海平等観」(演義鈔三十五所引、二七一頁上)と比較すると興味深い。

7 妄尽還源観(大正蔵四五卷六三三七頁中下)

8 法句経のこの一文は楞伽師資記や曆代法宝記などにも引用されている。法句経については水野弘元博士「偽作の法句経について」(駒沢大学仏教学部研究紀要第十九号)参照。

9 華嚴経疏卷五十(大正蔵八八二頁上中)

10 同 (同、八八二頁中)

11 演義鈔卷一(大正蔵三六卷四頁中)

12 華嚴経疏卷一(大正蔵三五卷五〇三頁上)

## 五 おわりに

以上、華嚴経にあらわれた海印三昧をみ、さらに、中国華嚴学における海印三昧の位置づけとその思想内容を論じたのであるが、きわめて不十分たるをまぬかれない。というのは、

華嚴の教理学の全体系をしっかりと理解した上で、さらにあらためて海印三昧の位置づけを考察するのになければ、その真意を把握できないからである。けだしその道は遠くして、私の力の及ぶところではないが、本論では、ひとまず海印三昧のみをとりだし考究した次第である。

また澄観が海印三昧を「無心頓現」と理解したことは、澄観の禅から当然そうあるべきであったと思われるが、それについては、華嚴と禅との交流という、大問題に直面し、それを解決することなくしては、無心頓現の意味を正しく把握することは困難であると思うので、近く別稿において、「華嚴と禅との交流」についての論文を発表したいと思っている。

さらに海印三昧については、新羅の明晶に『海印三昧論』一卷があり、そのほか日本の道元禅師に「海印三昧」の卷(正法眼蔵)がある。これらについても考察を加えなければ、真に海印三昧を理解したことはならないのであるが、現在の私の力の及ぶところではないので、これらの問題については他日を期したいと思う。